エゾシカ対策推進委員会議事概要

１　日時

平成26年7月7日（月）　15:30～17:00

２　会場

札幌市中央区北3条西7丁目　第2水産ビル　8BC会議室

３　出席委員

伊吾田委員、宇野委員、岡本委員、梶委員、近藤委員、増田委員、松田委員、山村委員

４　概要

（1）挨拶

生物多様性・エゾシカ対策担当局長より挨拶。

（2）委員長、副委員長の選出

エゾシカ対策推進委員会設置要綱第4条第2項の規定に基づき、近藤委員、梶委員を互選により委員長、副委員長に選出した。

（3）議事

ア．平成26年度エゾシカの捕獲禁止及び制限（可猟区域）について（事務局説明）

イ．平成25年度エゾシカ狩猟解析結果報告書について（環境科学研究センター説明）

（主な意見等）

・世界的に見ても、毎日1頭ずつオスが獲れるというのは珍しく、オスジカを獲りたいハンターにも十分メリットがあるのではないか。メスジカは、当然、全期間無制限である。

・将来、個体数が減って、むしろこれ以上減らす必要がない時には、狩猟はオスジカを主に行うフェーズに移るのだということで、今の管理計画にもそれは書いてある。早くそのフェーズに移りたいというところも狩猟者には理解いただきたい。

・銃猟自粛区域も、狩猟専門家であれば、本来、捕獲することが検討できるのではないかと思う。現にエゾシカがこのような地域に逃げたら安全と学習している可能性もあり、そういう意味では、ここで何らかの形で捕獲する方法の検討を始めることは、割と急いでやらなければいけない、むしろ、鳥獣保護法が改正された今年からそういう検討を始めるべきで、捕獲専門家を育てて何をやるのか、是非検討いただきたい。

・メスジカの捕獲制限を1日1頭から2頭に変えた時は、捕獲数が増えた。しかし、2頭から3頭、3頭から無制限にした時は、ほとんど変化がなかった。処理時間が関係すると思うが、オスジカにしても結局、1、2頭というのは影響があるが、無制限は、それほど意味がない。どのような政策を誘導していくのかという分かりやすさが重要かと思う。

・メスジカが捕獲されやすい捕獲環境づくりが重要。捕獲する際にメスオスでどうかというよりは、捕獲物の処理や引き取りの環境が整えば、1日当たりの捕獲数も伸びる。有効

活用のための引取先が近くにあれば、メスジカが積極的に捕獲されることもある。

・メスジカが捕獲されやすい時期に捕獲できる体制を作ることも大切で、例えば、越冬期後半の3月、4月は狩猟ではなかなか対応できない時期は、かなり麓にメスジカが下りるので、この期間に積極的に獲るような許可捕獲を設定することで、全体のメスジカの捕獲を増やすことになるのではないか。

・メスジカに誘導するためには、安易な規制緩和をすべきではないが、行政判断として、それはそれであってもしかるべきではないかと思う。それで、メリットもデメリットも無く、特に、メスジカ捕獲へネガティブエフェクトがあるわけではないが、姿勢としてはメスジカ捕獲への誘導していくべきだろう。

・銃猟自粛区域は、エゾシカの越冬地が終結するところなので、猛禽類との共存はもちろんあるが、戦略的に拠点を叩く作戦を検討した方がいい。地域の実態がよく分かる市町村や専門家と組んで、どうやって減らしていくのか、一定の方針を出して地域での戦略、戦術を組み合わせていけるような仕組みづくりを早急にやっていくべきである。

・担い手の問題も各地の猟友会によっては、中期的にものすごく担い手が減っていく地域が出てくる。改正法の捕獲者がどういうものになるのかよく分からないが、捕獲をする担い手も作っていかなければいけない。そういった意味で、現実的に今すぐできることをまずやってみること、もう一つは、あと5年後、10年後にどういう体制が理想の体制なのかという議論も必要である。

ウ．平成25（2013）年度エゾシカ個体数指数について（松田委員説明）

（主な意見等）

・東部地域については、ある意味で強い表現で減少したと推定されると言い切っても構わない。西部地域に関しては、可能性があるという程度で、ただ、上限が横ばいになった。南部地域については、指数を算定するには情報が足りないが、ただ、2,000頭獲っているということは、かなりアグレッシブなものがあったのではないか。

・南部地域については、ライトセンサス、CPUE、SPUEの検討、JRの列車支障件数のどれを見ても、この5年ぐらいは増加している。指数化を検討したが、まだ信頼幅が非常に広く、基準年を何年に据えて信頼できる形で指数値を発表するというところまでは、残念ながら至らなかった。

・ただし、5年連続して増加傾向がはっきりしているので、特にメスジカの捕獲数を大幅に増やし、一度減らしてみないと生息数もはっきり分からないが、思い切った手が必要。捕獲推進プランの検討の時には検討していただきたい。今の捕獲数では足りない。

・南部地域では、ライトセンサスのデータが揃ってきたが、まだ年数が足りない。あと、捕獲数も十分信頼のある推定値を得るには足りない。

・北海道の方法は、ベイズ法と呼ばれ、これは他県で普及している。この方法で信頼できることをするには、最低数年、できれば 10 年ぐらい欲しい。

・ある程度ラフな段階では出る。もう一つは、先に獲って減ったという兆候が現れると、これは格段に早く推定ができるのもこの方法の特徴である。

・今回、西部地域で絶対数を書くことができるようになったのも、昨年までは別のやり方で工夫をしていて、今年と同じ方法では、上限は無限大みたいな話になりかねなかった

ところが、いろいろな仮定を置いてやっと数字が出てきたところがあるが、今年は、ほぼ東部地域と同じ推定方法で西部地域の生息数も出ている。これは、なぜかといえば、個体数が減ったという兆候があるのが大きい。

・単純に言うと、自分が銀行にお金を預けて全体の預金額が分からないが、これだけ減ったということが分かると結構分かる。ちょっと引き出して絶対数が分からないが、どうも預金の増え方が鈍っていますよと聞いただけでは総額が一体幾らか分からないが、減ったと言われたら、利率を考えれば分かる。そのような状況で、今は結構分かるようになってきている。

・数が増えると出生率が減って死亡率が増加するので下がるということはあるが、残念ながら、ニホンジカは極限状況にならないと落ちない。妊娠率も同じで、特にエゾシカの場合は、密度効果はあまり期待できないというのは、本州のシカに比べてもそういう特徴があるので、あまり考えなくていい。

・自然増加率を21％と仮定して、自然増加率と生息数の絶対数は同時に推定できないと申したが、ただ、指数に関しては、それなりに推定できる。絶対数ではなくて指数の方が重要である。

・必要な捕獲数に関しては、自然増加率の全体が変わってもほとんど変わらない。例えば、利率が15％、10万頭いる。そうすれば、毎年1万5千頭ずつ獲ってもトントンだということが分かる。例えば、利率が20％だとそうすると、実は10万頭ではなくて、もうちょっと少ない。でも、結局、1万5千頭を獲らなければトントンにならない。減ったか増えたかが分かっている状況では、これを減らすには何頭獲らなければいけないかということは、自然増加率や絶対数よりもずっと頑健な予測ができる。それを現在やっている。ちなみに21％という前提を16％に変えると、絶対数はもっと高目に出る。

エ．エゾシカの有効活用について（事務局説明）

（主な意見等）

・釧路市内の学校では、2008 年から学校給食での活用が実施されている。出前講座に駆り出され、シカ肉を食べたことがある人と冒頭で呼びかけると、ここ数年間全員が手を挙げる。学校給食の効果である。

・食文化の定着というのは、森づくりに並ぶぐらいの長い年月を要するが、外食産業などへの呼びかけがカンフル剤として効くだろうが、やはり、子どもの頃から馴れ親しんで食べて何ら抵抗がない、むしろ好物であるという児童生徒を増やしていくことが大事な教育だと思う。

・学校給食は、市町村が見ているところであって、では、道からはどんなふうに関わればいいのかというと、また別の問題があるのかもしれないが、働きかけをするという一文は是非とも入れ込んでいただきたい。

・文部科学省が 2015 年版の食品成分表を出そうとしているということで、新しい食品の一覧表を公開した。その中にエゾシカがあり、確定ではないが、来年度に大きく変わるかもしれない。これにより大きな追い風が得られる。この追い風を学校給食その他保育所給食や事業所給食などに落とし込んでいくために、今年こそ、栄養士、管理栄養士への呼びかけが肝になる年ではないか。

・市町村の学校給食等への働きかけとあわせ、さらに栄養士会を抱き込んでいくような準備を是非今年度に取りかかっていただきたい。
・捕獲意欲という面で言うと、やはり、1 日に複数頭のメスジカを獲るとなると、自分のところで処理できない分はこういう施設に回ることになると思うが、それが有料で買い取られると捕獲意欲に繋がる。
・現場では業者が生体捕獲の方にいく原因の一つとして、死体が入ってきた場合は数時間の間に処理しなければならない。ある時期に捕獲が集中すると、処理し切れず受入れが止まる。狩猟期は、ある程度仕方ないが、例えば、許可捕獲では捕獲エリアをうまく調整して受入れが止まらないような状態が作れると処理業者にとっても、また、捕獲した方も確実に受け取ってもらえるというコーディネートが重要になる。
・有効活用の取組みが全部ブランド化やホテルで、牛肉でも同じだが、ロースなどを売る場合は、みんなそれでブランド化を狙うが、我々はフルボディで売らなければいけない。スネもバラもみんな売らなければいけない。そういう意味では、マーケットではなく、スーパーでなければいけなくて、そういう肉のためには囲いわなで衛生的にきちんと処理する必要があり、戦略をもう少し広く考えたほうがよろしいかと思う。